Atlas X, 2014　cotton thread, textile hardener, copper, brass
Installation made up of 46 items
40x60cm and 100x120cm, detail

I

I Vangeli del faggio, 2016
textile collages, 12 elements 40x50 cm, detail.

おたふく自画像ワークショップ　10月13，14、22，23日に大町リノプロにて実施

創造物というものは新しいわけではありません。しかし私たちが古いものを変質させて新しい形にする時、アートが生まれます。私は大町に訪れて、この町の歴史や文化に属する場所や物に出会い、その人類学的な感覚を理解する事に努めつつ、今回のテーマである「時・水・稲作」との関係性を模索しました。そして、そのテーマや象徴的なオブジェに対して、今までに無かった新しい視点を提案します。
「囲炉裏」は部屋に浮かぶビンテージの大きなアイコンになり、「おたふく」はピンクの神様として、ワークショップ参加者によってリデザインされ、「稲荷」はマンガのキャラクターの様な着物をまといます。作品「狐と宝」の空間は、一時的に存在する、言葉やイメージの境界を超えて小さな世界です。

The creation never is something of new, but everything we trasform from old things to new forms may be art. When I saw the objects and the places belonging to the history and the culture of this city, I tryed to understand their anthropological sense and their connections with the topics of rice time and water. I decided however to play with this signs giving them a new perception rather than take their meaning for granted. The “irori” becames a big vintage icon floating in the room Otafuku is a pink goddess whose face is redesigned by the people who attended in the workshop, and Inari wears a kimon like a manga character. “Fox and the jewels” is the small, temporary world, where the borders of words and images can be crossed and shifted.

マリーナ　ガスパリーニ　Marina Gasparini

1960年、イタリアのガビッチェ・マーレに生まれ、ラヴェンナ美術アカデミーを卒業。画家として作家活動を開始し、90年代よりテキスタイルを用いたとした新しい表現方法を確立。2000年よりNET ARTのオンラインプロジェクトに参加。日常の発見をテーマに、テキスタイルを用いた住空間と言語によるインスタレーションを制作。個展やグループ展に多数参加し、近年はミラノ・トリエンナーレやポーランドのテキスタイル中央博物館で開催されている国際タペストリートリエンナーレに出展。ヴェネツィアの美術アカデミーでの教職を経て、現在はボローニャで教鞭をとる。開催した主なワークショップは「マッピング・サラマンカ（スペイン・サラマンカ大学）2010」、「アーキスケープ（フィンランド・オウル美術館）2012」、「ストリング・ポートレート（米イリノイ州・ゲイルズバーグ市民美術センター）2013」、「アルファベトランテ（ポルトガル・リスボン大学及びトルコ・ミマールスィナン大学）2013」等。

マリーナ・ガスパリーニ：狐と宝
展示場所：大町リノプロ 1F
信濃大町あさひアーティスト・イン・レジデンス滞在制作展
稲穂の実る音 SOUNDS THAT GROW THE RICE
２０１６年１１月１１日［金］－ １１月２０日［日］
大町市街地三カ所　＋　鷹狩山山頂古民家

信濃大町 AIR 事業推進協議会 事務局
〒398-8601　長野県大町市大町 3887
（大町市役所　総務部まちづくり交流課内）
E-mail: asahi-air@shinano-omachi.jp
TEL: 0261-22-0420　/　FAX: 0261-23-4304
発行：信濃大町アーティストインレジデンス事業推進協議会
助成：アーティスト・イン・レジデンス in 信州 モデル事業

マリーナ・ガスパリーニ
Marina Gasparini
狐と宝
The fox and the jewels

信濃大町
あさひAIR
http://shinano-omachi.jp/asahi-air

マリーナ・ガスパリーニ

Marina Gasparini / イタリア

Interview

■信濃大町での滞在制作はいかがですか？
今回のあさひ AIR の滞在制作で、私は初めて日本に来ました。空港についてタクシーでそのまま信濃大町に到着したので、大町で日々、日本文化を感じてとても刺激的な生活をしています。最初に興味をもったのは、大町市史に掲載されていた囲炉裏のイラストでした。その幾何学的な形に興味をもって、このイラストから、私の創作活動は始まったんです。

■マリーナさんは子供の頃、何をして遊んでいましたか？
私は 5 歳のころ、アフリカのナイロビに住んでいました。近所に 3 ー 4 人、イタリア人の子供たちがいて、よく一緒に遊んでいました。絵を描くのがすごく上手な年上の男の子がいたので、負けたくなくて雑誌や絵本の絵を真似して描いて練習してました。ずっと絵を描いていた記憶があって、その理由はふたつ。1 つ目は、上手に絵を描くとみんながほめてくれたこと。そして 2 つ目は、立体的なおもちゃの代わり。本当は着せ替え人形で遊びたかったんですが、可愛い人形がなくて、だから現実の延長線上に絵を描いていたんだと思います。

■なぜ、アーティストになったのですか？
絵が好きだったので視覚的な仕事には昔から興味を持っていました。アーティストというのは、他の人から呼ばれるものだと思うので、自分自身をアーティストというのは変な感じがします。私が学生だった 70 年代後半のイタリアは政治的に安定していなくて、様々な悲しいことがありました。だから 70 年代後半のアートはとても社会的だったんです。コンセプチュアルアートとか、パフォーマンスとか、アートと政治と社会活動が密接に関係していた時代で、手仕事が好きな私としては、最初はよくわかりませんでしたが、1981 年に初めての展覧会を ALEPH（アレフ）というディスコで開催しました。ラップやヒップホップ等の黒人音楽をイタリアに先進的に持ち込んだ刺激的な場所で、私にとって社会との接点でもありました。今考えると、アートを続けているきっかけは、その時だったのかもしれません。

■今回のマリーナさんの作品について教えてください。
今回の展示は、囲炉裏をイラストどおりに白い糸で巨大化した作品「囲炉裏 / 稲荷」と、ワークショップでおたふくのお面を模ったピンクマスクに自画像を縫い込んだお面を使用したパフォーマンス作品「Riso Rosa Blessing」、そして全体をまとめた「狐と宝」という 3 つの作品で構成します。
私は制作過程を大切にしています。大町に来て、囲炉裏の幾何学的なイラストと出会って、囲炉裏の象徴的な意味、火、一緒にいること、家庭、などから連想するモノづくりのプロセスを楽しみたいと思っています。今回のテーマである「時・水・稲作」もその最初のテーマです。例えば、お米を意味するイタリア語の RISO には、同時に笑うという意味があります。西洋式の結婚式でお米を新郎新婦に向かって撒くのは、食べる事に困らないように、という意味のある儀式的な行為です。そこで、笑顔の仮面であるおたふくに注目し、ピンクの糸で自画像を描いてもらうワークショップを行いました。
おたふくのお面をつかっていてこんな事をいうのも変なんですが、私は実は仮面が嫌いなんです。私が住んでいたベニスでは 16 世紀から冬に仮面をかぶって外を歩く風習があります。仮面をかぶっていると誰だかわからなくて、とても怖い印象でした。仮面をする行為は精神分析的な観点から言うと、キャラクター（人格）の「死」と繋がっていて、それが受け入れられなかったのだと思います。17 世紀以後には仮面をかぶった犯罪が増えて法律で仮面をかぶることが禁止になり、現在では 11 月の 2 週間だけ、ベネチア仮面カーニバルという形でその歴史が残っています。色々考えた末、ピンクマスクをかぶってパフォーマンスを行うことにしました。

囲炉裏 - 火 - 家族 - 時 - 水 - 稲作
お米 - 笑い - 結婚 - 仮面 - 死 - パフォーマンス

私にとって、この連想ゲームのような制作プロセスは、一つの知的な作業なんです。私は知性には 2 種類あると思っていて、ひとつはゴールに向かって一直線に進む理性的な効率重視の知性、そしてもう一つは家庭的で直観的なプロセス重視の知性です。テキスタイル（織物・布）とテキスト（文）は、様々な要素を織り込んでいくという意味で同じ語源を基にしていて、縫うという行為には、その時間を楽しむような瞑想的な知性があります。

今年の 4 月にミラノトリエンナーレというテクノロジー（科学技術・工業技術）デザインの祭典に呼ばれたんです。そこで私の作品が手仕事のエリアで紹介されて、記者の一人が「編み物がテクノロジーだってさ」と笑っていたのが印象的でした。縫うという行為は基本的なテクノロジーですし、現代の根本的な課題として、道具を使うのか、道具に使われるのが、ということがあると思います。IT がいくら発達しても、それを活用する人間が育たなければ、本当の創造性は生まれないんです。ワークショップで、小さな子供が縫うのにすごく集中していたんです。IT 世代の子供たちが退屈せずに縫う作業を楽しんでいるのが、すごくうれしかったです。

■大町の皆さんに一言お願いします。
大町に来て、人々がとても親切で驚いています。親切さや優しさによって他人と関係する日本文化に感銘をうけました。日本人が親切だという事は世界的にも有名ですし、ステレオタイプな認識しかしていませんでしたが、大町で実際に体験して、お互いの親切さで社会が持続されている文化は世界的に見ても多く残っていないように思います。それはとても深い人と人の関わり方だと思いますし、それを教えてくださった大町の皆さんにとても感謝しています。

「夢は覚めるように出来ている」展覧会：第１回所沢ビエンナーレ― 引込線― (2009) 会場：西武鉄道旧車両整備工場

木炭により野太い線が刻まれ岩肌のように凹凸に造形された紙をかつて鉄道車両が出入りしていた扉のシャッター（5×5M）に設置した作品。（撮影：山田大輔）

Artist Statement

『たけしの誰でもピカソ』（1997-2009）という、ビートたけし司会のテレビ番組を知っているでしょうか？　芸術の敷居を高くする、『才能』という言葉や、インテリチックな専門知識はひとまず忘れて、『ふつう』の目線で芸術を楽しもうというコンセプトの番組です。ドイツのアーティスト、ヨーゼフ・ボイスの名言『全ての人は芸術家である』が、番組タイトルの由縁かどうか知りませんが、誰もが『それぞれの新しい毎日を切り開く創造主（＝芸術家）』であるという指摘は、きっと今でも新鮮な『世界の眺め方』を伝える魔法の言葉に違いありません。

芸術に『癒し』の効能があることがよく知られているように、作品はオアシスとして機能したり、常識の盲点に気づかせてくれたり、全く未知の快楽に誘ってくれたりします。さらには政治的なメッセージを言葉以上に伝達し、友達作りのツールにさえなっています。つまり今、芸術とは、『私たちが求めるどんなものでもありえる』わけで、いわば『何でもゲルニカ』なのです。

私は、誰もが、そしてどんな物体も『表現者』であり、どんな物も、さらに誰も彼もが『表現物』でもあるという認識に基づいて世界を眺めます。そうやって、目の前の光の現実を出来るかぎり丁寧に観察し、表現することを試みるのです。

january 2002　h275cm w172cm　鉛筆、紙

作品紹介　死角の眺望 / 軸足の使い方

大町に来てから半月以上の間、雨雨雨で、ちょうど稲刈り時期だったこの頃、夕方の銭湯で耳にする会話もとにかく雨雨雨。見所だらけの大町市、カッパを着込んで走り回る自転車の背景は、気づくと稲穂の黄色い景色。青木湖の底で湧いた水が農具川となって『あさひ AIR』脇を通り過ぎ、高瀬川と合流する。息を飲む鷹狩山のてっぺんからの眺望。粒立つ街並みが東西で大きく立ち上がる連峰に挟まれ広がる。今回、私の作る描画体が設置されるのはそんな場所である。それは連峰であり、何処からか来て何処かへ流れゆく水流の合流地点でもある。また、麓の土蔵では、大町滞在の日々を物語る『軸足の使い方』を展開。

水谷　一　Hajime Mizutani

アーティスト。表現すること、表現されること、表現されないこと、表現されたもの、表現する人について思考する。近年の展覧会に「引込線 2015」（旧所沢市立第２学校給食センター、埼玉県、2015 年）、「憲法を書き展示する会」（gallery&space 弥平、神奈川県、2015 年）、「反戦 - 来るべき戦争に抗うために」（SNOW Contemporary、東京都、2014 年）、「瀬戸内国際芸術祭」（旧三豊市立粟島中学校、香川県、2013 年）等。1976 年三重県生まれ。2003 年多摩美術大学大学院修了。

水谷 一：死角の眺望 / 軸足の使い方
展示場所：鷹狩山山頂古民家 / 蔵（伊藤金物商会所有）
信濃大町あさひアーティスト・イン・レジデンス滞在制作展
稲穂の実る音 SOUNDS THAT GROW THE RICE
２０１６年１１月１１日［金］－ １１月２０日［日］
大町市街地三カ所　＋　鷹狩山山頂古民家

信濃大町 AIR 事業推進協議会 事務局
〒 398-8601　長野県大町市大町 3887
（大町市役所　総務部まちづくり交流課内）
E-mail: asahi-air@shinano-omachi.jp
TEL: 0261-22-0420　/　FAX: 0261-23-4304
発行：信濃大町アーティストインレジデンス事業推進協議会
助成：アーティスト・イン・レジデンス in 信州 モデル事業

水谷 一
Hajime Mizutani
死角の眺望 / 軸足の使い方
View of the blind area / Use of the axopodium

信濃大町
あさひAIR
http://shinano-omachi.jp/asahi-air

水谷 一

Hajime Mizutani / 日本

Interview

■信濃大町での滞在制作はいかがですか?
私は様々な場所に滞在し、その場所で表現するという事をやっています。大町に来てしばらくは、自分の興味がいろんな方向に分岐していくのを綱渡りして、場所としても興味の内容としても、あっちに行ったりこっちに行ったりしながら、3 週間くらい過ごさせてもらいました。
例えば、鷹狩山山頂の古民家に半年間、引きこもるとします。そうすると町についてはほとんど何も知る事が出来ないけれど、その古民家という場所にまつわる情報を色々と得る事が出来ます。季節の移り変わりの機微、葉っぱの落ち方、太陽の差し方、どういう風に湿気が這い上がって来て、消えて行くのか、天気や時間によって現れる昆虫の数や種類、そういう細かいことを全部記録していく事が出来るわけです。それはそれで、場所の状態を「知っていく」わけです。私は何を知るかよりも、知るための基軸をどこに置くかについて考えています。基軸の位置、基準をどういう風に設定するかという事で知の質が変わってくる。そういう基準になる条件の一つとして、今回のあさひ AIR では自転車を借りる事が出来たので、それを使って大町の沢山の場所へ行きました。

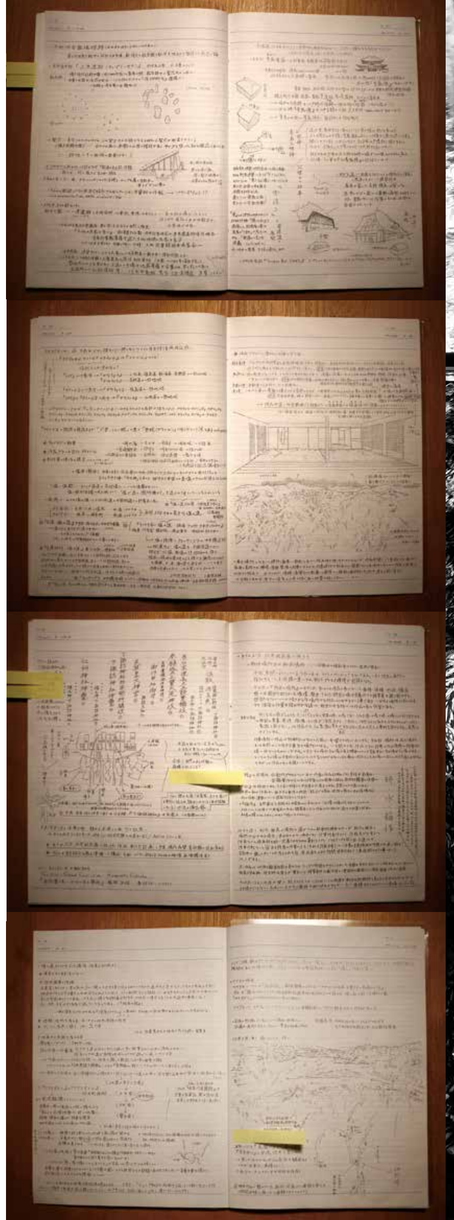
■水谷さんはなぜアーティストになったのですか?
私は当初、伝えたい事が伝わらないという“もどかしさ“を持たない人、言いたい事を過不足無く 100%表現出来る人が、つまりアーティストなんだと思っていました。そうした存在になる為の訓練としてデッサンがあったり、関門として美大受験があると思っていたし、美術大学に入れば皆、アーティストなんだと信じていたのです。大学に入ってあれっ? て気がつきましたが、全然違いました。美術大学に入ったところで、私は言いたい事を 100%表現出来るようになってはいませんでしたし、周りもそうだったと思います。皆がアーティストなんて事もありません。
夜中、寝る前に、名作が出来た、すごいものを作ってしまった、なんて思って筆を置いた絵を、朝起きて見た時、ひどく未熟に感じてがっかりするという事が、学生の頃はよくありました。また逆に、不出来だと思って放置した絵に数ヶ月ぶりに出会って、その魅力に感心するなんて事もありました。同じ絵を同じ私が眺めてはいますが、それぞれのタイミングで違う価値観が存在しているわけです。同じものを違う方法で見ているという言い方も出来ます。違う方法で見て、それを受け入れる／受け入れない、作品として発表する／お蔵入りにする、描画を続ける／諦めて捨てる、なんていう選択肢がそこに派生的に生まれてきます。夜中にちょっと気分が盛り上がった時に描き出した何かと、熱が冷めた朝、理性的な状態の表現、私は、それを両方とも受け入れる事は可能か、それらを受け入れる為にはどうすればいいか、というところで新しい制作をスタートさせました。

■水谷さんの「描画体」について説明して頂けますか?
描画体とは、私のいくつかの作品傾向を説明する時に便利に使っている造語です。それは確かにいわゆる絵画と呼ばれる物と同様、支持体(キャンバスや紙等) という「地」の上に、「図」としての描画を施しています。ですが、そこで「地」は「図」に従属する存在ではありません。かと言って、彫刻に彩色を施した感じの物とも違います。「地」と「図」の両者は共に自立しながらも混じり合って存在しています。私の作品のこの状態を「絵」と言うのも、「彫刻」と言うのも、ちょっと違う気がしました。でも両方の要素を併せ持っているとも言える。そういう自分がやっている事を簡潔に表そうと考えた時に、「描画体」という言葉はしっくり来たのです。始めに話した「知る方法」と同じように、表現すべき何かを表現する目的で技術を考えるのではなく、技術が表現されるべき何かを生むと私は考えます。技術は物事を知る基準であり、表現の軸足なのです。ですから私の作品にはエスキース（下描き） という概念がありません。全てが本番です。「描くということ」をどうやるかという「方法の構築」が全てです。そうした意味で、私にとって制作とは多く、自分をモルモットにする事なのです。あるルールによって被験体である自分を拘束する。たまに描画体の作品を心電図に例えたりします。ルールによって抽出された人間の生命活動の蠕動。そうした意味で両者は同じものです。

■すべてを現すための偏った表現、なんですね。
一人の人間がする事って、それを誰かに見せるかどうかはともかくとして、どれもこれも表現だと思うんです。洗濯や料理も、その人が受けてきた教育、慣れ親しんだ社会や文化、そうした色々からの影響を受けた一人の人間を通って表に現れて来る物です。でもそれらは多く、残って行く類の物ではありません。日常の積み重ねで人生は出来上がってきているわけだけれども、その一瞬一瞬は決して目に見える形で保存されません。
それはいわゆる美術制作でも同じです。ただ、私の制作の場合は方法に特化して、すべての感覚、行為を肯定していくというやり方なので、ある意味で、制作している一人きりの時間が全部残っていると言えます。ある特定の視点によって偉人の人生を再現していく大河ドラマのような物というよりも、残像、あるいは私の分身に近い物として作品があるのです。
これまでの話と関係ないかも知れませんが、千葉にある川村記念美術館が、シーグラム壁画というアメリカ抽象表現主義の画家、マーク・ロスコの絵のシリーズを持っています。私がそれを初めて見たのはもう 20 年近く前で、その頃はロスコというアーティストについて、まだよく知らなかったのですが、その絵と出会った時、なんだかロスコという人間を丸ごと全部知れたような気分になりました。ロスコというおっちゃんの、まぁ、亡くなった方をおっちゃんっていうのも変な話なんですけど、若いころもあったわけで。ともあれ、本人に会うよりも、本人について知れた気分になる、そういう事がある事を知りました。

美術鑑賞とは、創作者が発信した物を鑑賞者が受け取る事と捉えられがちだと思いますが、私は見るという行為もまた、表現行為の一種であると考えています。ですので私は、いわゆるメッセージの伝達というよりもむしろ、鑑賞者自身の一期一会のタイミングによって、作品という現象をリクリエイトしてもらう事を大切にします。個人が何に価値を見出すかは、その時々で変わって来ます。その変化をもたらす物は、体調かも知れないし、知人の熱っぽい言葉かも知れないし、昨日新聞で読んだ何かかも知れません。いずれにしても、私の作品は、見るという行為が見る人それぞれの独自性を伴った創造行為であるという事を実感する物であって欲しいのです。それはおそらく、喜びであると同時に絶望でもある、どうしようもなく自分しか見れない景色を見ているという手触りです。
ところで自明ですが、自分と自分以外の人が同じ物を同じように見ているか、同じ言葉を同じように扱っているかという事は、厳密には、どこまでいっても確認しようがありません。もちろん、同じ物はある程度同じように見ていて、同じ言葉はある程度同じような感覚で使っている、といったような沢山の約束事を前提として、人は人と関係を作って、そして各々の個別性を保証し合ってもいます。確認しようのない事なんて、考えても結論は出ないわけで、考えてもしょうがない事として、問い自体、忘れられていきます。物心つくとは、この忘却の事を言うのかも知れません。つまり私の作品が目指すのは、物心つく以前の景色の前に立つ事とも言えるのです。

■大町の皆さんに一言お願いします。
今回、「時・水・稲作」というテーマを頂き、必然的に私の滞在も制作も、この三つのキーワードと共にありました。毎日、日付と天気をノートに書いて、気になった事、調べた事、行った場所をメモして、初日から一日一日を踏み締めるように過ごしました。制作の日々の中、一日が 4 ページだったり、五日間が 1 ページだったりして、時間という物の通り一遍でないあり様を身に刻む毎日が今も続いています。9 月はどこへ移動しても黄色い稲の広がりを目は常に拾っていて、そういうのは初めての事ですし、何となく、大町で過ごすほど体はこれまでと違う風に変わってくのだろうなという気分になりました。10 月半ば頃からは、新米が美味しくて、太るなあと思いながらも、ついつい食べ過ぎる日々です。水と言えばまず農具川です。宿舎のすぐ脇を流れてるだけと言えばだけですし、だいたい意識の外ですが、ふとした瞬間に蘇る水流の音にハッとさせられる事もしばしばで、様々示唆を与えてもらいました。本当に短い間での事でしかありませんが、大町の、実に多くのトピックを興味の赴くままに辿り、目的を考えずに思索を巡らして行くという、とても贅沢な時間を頂き、そして、一生懸命作品を作りました。アーティストなんてやっぱり得体が知れないと感じられる方がほとんどだと思いますが、作品を見れば少しは、得体が知れるかも知れません。



「John Adams Hall (2015 年)」という作品は、私が学生時代の２年間を過ごしたロンドン大学の学生寮、ジョン・アダムス ホールで出会った３人の人物を描いている。その３人とはユミコという一見、学生には見えない年代の女性、不親切で有名な受付のジェッド、そしていつも歌をうたっている清掃係のレベッカである。この作品は、彼らに好奇心をそそられた私が、やがてそれぞれ人物の秘密を発見するまでに至る、３人との関係性の移ろいを表している。

2014 年、私はある小さな島の「マラ小学校」に最後に残されたたったひとりの生徒のことを聞いた。私はその生徒の生活に興味を持ち、リサーチのためその島を訪れた。しかし撮影を始めてまもなく、カメラが授業の邪魔になることが分かり、学校を後にした。
島をあても無く歩いている時、ベンチの下で寝ている犬を見かけた。
「Island」は、日々、フェリー最終便が出た後は空っぽになってしまうこの島に暮らす数人の住民を映し出す映像作品である。映像を通じて、あなたは今どこにいるのか？なぜここにいるのか？あなたに何が起こったのか？を観客自身に問いかけている。
私は映像を見る人に、被写体のことを気にかけている彼ら自身の存在に気づいて欲しいと思っているのである。 すぐそばを通る観光客も意に介さず、一時間以上寝ている犬を見て「この犬はどこから来たのだろう、飼い主はいるのだろうか。食べるものはあるのだろうか、病気なのだろうか？」など様々な問いが思い浮かんだ。

近代の哲学者、エマニュエル・レヴィナスは、他の存在を問うことは自分自身の存在という奇妙さを経験することだ、と言っている。問いかけがなんらかの答えや真実をもたらさずとも、この思考のプロセスそのものが、問い自体を超えた存在というものを気づかせてくれる場になるのだ。

私のカメラを通して被写体の真実というものを見せることはできないと思っている。私がアーティストとしてできるのは、私のカメラの視線を通して見る人に被写体に対する彼ら自身の問いを考えさせること、私の編集を通して観客に好奇心を呼び起こすことだ。

Artist Statement

私の作品は現実に起こっていることを基にしているため、ドキュメンタリーと捉えられます。実在する人々との関係性の中で、ある特定の人たちに好奇心を刺激されることで、問いが生まれます。私の作品はそういった問いへの私自身の反応です。このドキュメンタリー作品はアートでもあり、実験映像でもあります。ドキュメンタリーの新しいかたちとして、映像素材をコラージュすることによって新たな「モード」や「ストーリー」を創り出すことを目指しているのです。被写体との関係性の変化を時間をかけて追っていくこと。私と被写体の間の交わりや衝突、揺れ動く感性などの経過を記録することによって、被写体と観客、そして私自身の倫理的な関係を問う「場」を作りたいのです。他者へ問いかけることは、彼らに思いを向けることです。自分以外の存在に関する真実を、全て知ることはできないかもしれませんが、それを考え続けることに大きな意味があるのだと思います。

作品「ご飯、食べましたか？」について

『スプーン一杯には一体いくつの米粒があるのだろう？』と思ってスプーンの上の米粒を数えていた時に、小さな虫を偶然見つけた。そして次の瞬間に私の頭には「この虫にとって一粒の米とは何なのだろう」という問いが浮かんだ。日常生活の中で生まれた好奇心はやがて「Did you eat rice?」というプロジェクトにつながっていく。アジアの国では「ご飯、食べましたか？」という言葉はお米のことではなく「（朝食、昼食、夕食など時間の決まった）食事はしたか？」という意味であることが多い。また、調子が悪そうな人に使われる「どうしてる？」「元気？」「大丈夫？」などの意味として使われることもある。
この実験映像作品「Did you eat rice?」では信濃大町の農家の日常生活、特に稲の収穫の際に現れる、彼ら農家と自然の繊細な関係性が描かれている。映像の中で作品が「ご飯、食べましたか？」と問いかけるのは、農家や米栽培ワークショップに訪れた小学生、水田に潜む虫、土、そしてご飯の度に見る、米の一粒といったたくさんの被写体である。

Introduction of current work ‘Did you eat rice?’

“How many grains of rice are there in a single mouthful?” While counting these grains, I met a tiny insect by chance. I immediately thought, “How would this insect perceive this grain of rice?” These curiosities in my daily life continues within the project ‘Did you eat rice?’
In Asian food culture, ‘Did you eat rice’ means ‘Have you had food (usually refers to a specific meal: breakfast, lunch or dinner)?’ Additionally, it could also be used especially when greeting others that one may be concerned about, for example, “How have you been?”, “Are you OK?”, or “Is everything all right?”
The experimental documentary film ‘Did you eat rice?’ features some sensitive relationships between some local farmers and Nature, which can be seen in their ordinary lives and especially during the rice harvest in Shinano-Omachi, Japan. Within a filmic relationship, this work asks the question of “Did you eat rice” to various subjects in the film, including the land, the farmers, primary school students who have experienced rice growing workshops, the insects who dwell within the rice paddy and even single grains of rice that are present in every meal.

エリー・キョンラン・ホ　Ellie Kyungran Heo

主題として選んだ記録映像をコラージュのようにつなぎ合わせる手法で、実験的な映像作品を制作するアーティスト兼映像作家。作家とテーマの間で生まれ、刻々と変化する交流、衝突、揺れ動く感性の経過を記録する。制作過程において、そのテーマと観客、そして作家自身の倫理的な関係性が問われる「場」を生み出そうと試みる。1976 年韓国生まれ。高校美術教諭の経験を経たのち、ロンドン芸術大学卒業、ロイヤルカレッジオブアートを修了。

エリー・キョンラン・ホ：ご飯、食べましたか？
展示場所：いっし・あーとすぺーす

信濃大町あさひアーティスト・イン・レジデンス滞在制作展

稲穂の実る音 SOUNDS THAT GROW THE RICE

２０１６年１１月１１日［金］－ １１月２０日［日］
大町市街地三カ所　＋　鷹狩山山頂古民家

信濃大町 AIR 事業推進協議会 事務局
〒398-8601　長野県大町市大町 3887
（大町市役所　総務部まちづくり交流課内）
E-mail: asahi-air@shinano-omachi.jp
TEL: 0261-22-0420　/　FAX: 0261-23-4304
発行：信濃大町アーティストインレジデンス事業推進協議会
助成：アーティスト・イン・レジデンス in 信州 モデル事業

エリー・キョンラン・ホ
Ellie Kyungran Heo
ご飯、食べましたか？
Did you eat rice?

信濃大町
あさひAIR
http://shinano-omachi.jp/asahi-air

エリー・キョンラン・ホ

Ellie Kyungran Heo/ 韓国

Interview

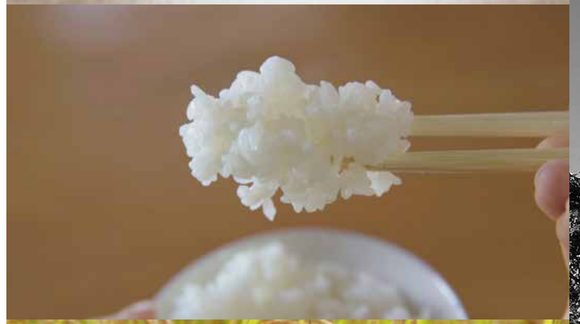
■信濃大町での滞在制作はいかがですか。
「時・水・稲作」というテーマに共感してあさひ AIR に応募して、本当に良かったと思っています。大町に初めて着いた時、黄金色に揺れる田んぼに感激しました。私は滞在期間中、様々な場所で稲作を取材、撮影させていただきました。黄金色に揺れる稲穂、収穫、日干し、脱穀、そして藁をまた田んぼに戻している姿にエネルギーの循環を感じ、沢山の大町の人たちと出会って、その真摯な生活に胸をうたれました。私の中で、深い黄金色の籾の内側の、真っ白できれいな米粒が大町の人のイメージと重なって、大町の人はお米みたいだと思うようになりました。

■エリーさんの将来の夢ってなんだったんですか？
私は昔から、学校の先生になりたいと思っていました。小学生の時は小学校の先生になりたかったし、中学生の時は中学校の先生になりたかった。素敵な先生がいて、そんな大人になりたいなと、先生に自分を投影していました。中学校の美術の先生が私にアートを勧めてくれたんです。高校の時も高校の先生になりたかったのですが、大学では、大学の先生にはなりたいとは思いませんでした。それもあって大学を卒業してから 6 年間、高校で美術教師をしていたんです。

■美術の先生から、なぜアーティストになったのですか？
私にとって 6 年間高校の美術教師をしていたことは、あらゆる意味で良い経験だったと思っています。クラスを受け持って教えた子供たちはそれぞれ、全く違う個性を持っていました。その時に実感した「多様性」は、私のアーティスト活動における大切な軸になっています。アーティストへの道を踏み出したのは、先生として一生過ごす事に迷っていた時に、ノマド的生活についてのある本に出合ったのがきっかけです。教師の仕事は本当に楽しかったのですが、自分にとって心地よい場所から抜け出して、より自由に生きる方法を試してみたいと思い、一念発起して、イギリスの美術大学に入りました。最初は自分がどんな方法で表現をしたらいいのかわからず、とにかく色々な表現方法を試して、自分にふさわしい、自由に開かれた表現を模索しました。その頃にアマ・カンワというインドの実験的な映像作家の作品に感銘を受けて、私自身も実験的な映像作品を撮り始めたんです。

■エリーさんにとって、アートとはなんですか？
私は、世界は見えるものが全てではないと思っています。別の言い方をすると、私たちが見ている全ては、私たちが見えない事によって創造されている。その「見えない事」に向き合う事が私のアート作品なんです。主題になる人や現象と出会い、長く深く関わるうちに主題との関係性が変化していく事自体を、客観的なカメラが記録する、という手法によって、ドキュメンタリー（記録映像）とフィクション（物語）の境界がわからなくなるような作品になります。私は自分の映像を「実験的ドキュメンタリー」と位置づけています。それは客観的な事実に基づいた記録映像ではなく、私と主題との関係性自体を実験、記録する私の物語なんです。それは何か刺激的で突飛な驚くべき事ではなく、普通の日常から滲みでるユニークさに一喜一憂するような、静かな変化の軌跡です。
また、私の実験的ドキュメンタリーを観客と共有するためには、どんな場所で、どんな音響で、どんな風に編集された映像作品と出会うのか？という事が大切です。私は何かメッセージを伝えたいわけではなく、観客が私と一緒になにかについて深く考える事のできる場所を創りたいと思っています。ですから、映画館の様な場所で決められた時間に大勢で映像を見ることよりも、観客が主体的に映像と向き合う「場所」をつくることで、映像の向こう側で私が感じている「見えない事」を感じてもらえたらうれしいです。

■最後に、大町の皆さんに一言お願いします。
映像作品「ご飯、食べましたか？」は、私から皆さんへの質問のようなものです。私はあさひ AIR に応募してからずっと「一粒のお米」について考えていました。大町の滞在制作を通して、本当に素敵な人たちに出会って、「一粒のお米」とはなんなのか、私なりの答えをみつけました。人とお米の自由な関係を考えながら制作した作品です。ぜひ、観て頂いた皆さんにも、「一粒のお米」について思いを巡らせていただけたらうれしいです。



5 images from : Sounds of the Sea, Crickets and Translucent Yellow

Artist Statement

私は作品の素材になる音やイメージを探して様々な場所を訪れ、五感を通じて「ふたつの異なる場所に同時に存在する」という可能性を創作活動を出発点にしています。感覚と密接に繋がる記憶は、一つの場所にいながら、別の風景を反響させ、呼び覚ますことがあります。その観点から、私たちが「想像」するとき、風景がどのように作用し、曖昧で視覚化しにくい自然現象を、私たちがどのように捉えているかを模索しています。

Yellowhammer Infrasound

(キアオジの超低周波・2016 年)

この作品では、アイスランドの小さな森で調査した超低周波音を記録しています。超低周波とは人の耳には感知できない低音の周波音で、この周波を観測することで地殻の動きや火山活動などを観察します。

2016 年春、私はこの特定の低周波音を求めてまだ雪に覆われたこの森を訪れましたが、そこで私たちが聞いたのは鳥の鳴き声だけでした。見ることのできない自然現象である超低周波音を、何らかのかたちに記録する試みです。

Sounds of the Sea, Crickets and Translucent Yellow

(海、コオロギそして半透明の黄色の音・2016 年)

この作品では、日本とオランダのふたつの土地にあるという全く同じ像を探しに旅にでました。その彫刻のひとつは名古屋にほど近い地域にある公園に、もうひとつはオランダの海に面した小さな町にあります。この作品では、ふたつの場所の音をひとつに混ぜ合わせる体験を試みました。

撮影に行った時、私はこの作品の「聞き手」が理解出来る言語がわかりませんでした。撮影は沈黙の中で行われ、会話が認識できずに流れていく環境では、他の音の存在感が際立ちました。

アナンダ・サーン Ananda Semé

オランダ生まれ。ヨーロッパの川や運河に浮かぶ船の上で育ち、現在はノルウェーとオランダを行き来しながら、テキスト、映像、そして写真を媒体に作品制作をしている。アントワープのセントルーカス学校を卒業し、ベインハルト文化奨学生としてレイキャビックのアイスランドアカデミーで芸術学の修士号を取得。主な展示にコーパヴォグル美術館、ノルウェー若手現代美術展など。また、オランダをベースにした複数のオンラインマガジンで執筆活動を行う。

覚書　高瀬川の木霊

私は「サウンディング」という行為を知った。
井戸の深さを確かめるように　ー　君は井戸に小石を投げ入れ、そしてじっと耳を澄ますのだ。
『ブレーンウォーター』アン・カーソン

夕方５時、山への道を進むなか陽が落ちていく
森のなかで聞こえる音、怖いようなわくわくするような。
薄暗い森の聞きなれない音、ゴーストストーリーのはじまりみたい。

科学で「サウンディング」とは、湖や海底で音波を使って行われる水深測量のことをいう
人間にとって、いまだ大部分が未知の領域である海底の地図は、サウンディングのデータで作られる
メリアム＝ウェブスター辞書によると、「サウンディング」は他にも「探査」「テスト」「世論調査」などの意味があるらしい
まるでコウモリが超音波を発して、その反響音で周囲の環境を知るかのように。

高瀬川沿いにある３つの堰を訪れたとき、ダムの静寂さ、山の緑、湖のターコイズ色に言葉を失った。
日本で「コダマ」とか「ヤマビコ」と呼ばれる現象のこと、この場所で叫ばれる名前の植物たちのことを想った。

Echo : landscape – language – sound　　エコー：風景 - 言語 - 音

大町に滞在中、高瀬川周辺、特にダムに近い場所の草木を調べて回った
ダムの建設中、いくつかの木は死んでしまい、また建設後に再緑化として新たに植えられた木もあった。
ダム建設で破壊された土地にどこからかやってきて、根を下ろした最初の植物の名前も知ることになった
ハリギリ、ニセアカシア、オオカメノキ。

「オオカメノキ」という言葉の反響は高瀬川の谷間でどんな響きに聞こえるのだろう
どうやったら「エコー」や「コダマ」といった自然現象を視覚化できるだろうか
そんなことを考え始めたのが、「高瀬川の木霊」プロジェクトに繋がっている。

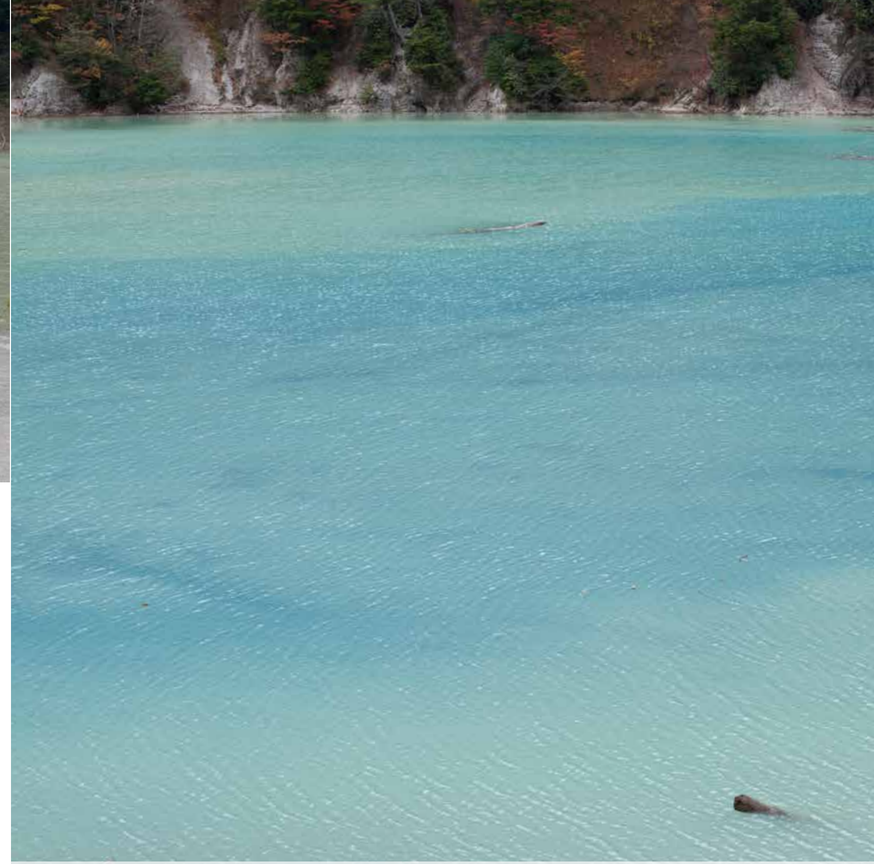
アナンダ・サーン：高瀬川の木霊
展示場所：大町リノプロ２F

信濃大町あさひアーティスト・イン・レジデンス滞在制作展

稲穂の実る音 SOUNDS THAT GROW THE RICE

２０１６年１１月１１日［金］－ １１月２０日［日］
大町市街地三カ所　＋　鷹狩山山頂古民家

信濃大町 AIR 事業推進協議会 事務局
〒398-8601　長野県大町市大町 3887
(大町市役所　総務部まちづくり交流課内)
E-mail: asahi-air@shinano-omachi.jp
TEL: 0261-22-0420　/　FAX: 0261-23-4304
発行：信濃大町アーティストインレジデンス事業推進協議会
助成：アーティスト・イン・レジデンス in 信州 モデル事業



アナンダ・サーン
Ananda Serné
高瀬川の木霊
Echoists of theTakase River

信濃大町
あさひAIR
http://shinano-omachi.jp/asahi-air

アナンダ・サーン

Ananda Serne / オランダ

Interview

■信濃大町での滞在制作はいかがですか?
あさひ AIR の公募を見たときに「水」というテーマに興味を持ちました。それで大町の風景写真を何枚か見て、ぜひ行ってみたいと思いました。正直に言うと、私は素晴らしい風景で多くの観光客に愛されている様な場所がそんなに好きではないんです。変な話ですが、工場地帯の茂みが注目されてなくて、可哀そうに思えてしまうというか。でも前回、日本の都市を一人で歩いていて、信号が青になった時の音楽に驚いて、魂に来る音だなぁと思いました。日本のそういうテクノロジカルなイメージを更新するように、今回の大町を体験しています。実は、大町って私が今住んでいるノルウェーにすごく似てるんです。ダムも沢山あるし、大町は日本のノルウェーというイメージで、それは少しシュールなんです。

■アナンダさんはどんな子供だったんですか?
私は船の上で育ちました。小学校の寄宿舎に入るまで、周りに同年代の子供がいなかったので、「空想の世界」でひとり遊びをすることが多かったです。小学校に入ってすぐの週末に、家に帰って「お母さん、私に本当の友達ができたの!」と喜んでいたそうなので、友達ができたことはとてもうれしかったのですが、幼少期に周りの誰にも邪魔されずに一人で自由な空想ができたのは、とても豊かな事だったと思います。空想上の友達がいたわけではないですが、風景や物から色々な物語を空想して楽しんでました。
私たちの家だった船が停泊できる場所が、都市では周辺の工場地帯だったり、スイスアルプスの自然の中だったり、という対照的な 2 つの場所を行き来していたのも、私の空想の世界を盛り上げてくれていたように思います。

■アートに興味をもったのはなぜですか?
子供の頃の夢は、生物学者か作家になって、世界中を旅することでした。空想の世界が続いている感じで、イメージが頭の中に浮かんだ時に、それを現実の世界でどう表現できるのか、という方法を模索することが、私にとってのアートへ向かう理由なのだと思います。
そもそも、私は一つの場所に縛られず、ボートで生活するように旅を続けていたかったんです。そういう風に仕事ができる方法として、生物学者と同様に、アートはひとつの選択肢でした。絵を描くのが得意じゃなかったので、文章や写真、映像を使って、表現するということをしています。ある特定の場所で自分が感じた現象世界の音や匂い、物、風景を吸収して、私の中の知識や物語と混ざって何かが生まれる。私には明確な興味があって、ある場所で印象的だと感じる「新しい瞬間」が大切なエッセンスになって、それをどうやって視覚化できるのか、というテーマで作品を制作しています。それはある種、なにかを追いかけているような感覚で、私が過去に制作した作品の先に、今の作品があるように感じています。

■アナンダさんの興味はどこにあるのでしょうか?
将来、みんながどのように「風景」を体験しているのかを調べたいと思っているんです。目の見えない人が、森の中を歩くのが好きだというのを本で読んだことがあるんですが、その体験を教えてほしい。きっと私が想像できないような世界を感じていると思うんです。そうやって、人それぞれが、それぞれの知覚で、それぞれ違った経験をひとつの場所からしていること、私たち人間がどのように「風景を五感で経験している」のかということを深めていきたいと思っています。そういう意味で、私は日本の風景がどのように経験されているのか、という事に興味を持っています。
今回の作品「高瀬川の木霊」では「エコー（反響・木霊）」をテーマにしていますが、これも今までずっと興味をもっているテーマなんです。例えば、私が育った船は海でどこにいるのか周辺の状況を計測するためにエコーロケーション(反響定位:自分から発した音が何かにぶつかって返ってきたもの（反響）を受信し、その方向と遅れによってぶつかってきたものの位置を知ること）という方法を使います。そういう経験が私の頭の後ろの方にあって、日本で高瀬渓谷に行って「やまびこ」や「木霊」という言葉に出会った時に、今回の作品の形が見えてくるんです。

■目の前の現象と経験が作品として混ざり合う。
私の作品は感情的ではありませんが、すごく気分に左右されています。最近、芸術大学の授業でも「調査」という言葉をよく使うんです。科学的な証明を主題に制作活動をしている人たちも多くいますし、美術館へ行くことがリソース（資源）調査と呼ばれたりする。それらはすごく感情と離れた主題への向き合い方で、それはそれで面白いと思うのですが、少し危険なのかもしれないと思っています。直観を深めていけるのがアートの良さだと思うので、すべてが説明可能だという錯覚によって、魔法としか思えないような瞬間を忘れてしまっているような気がするんです。

■大町の皆さんに一言お願いします。
ずっと同じ場所にいても、やっぱり私は新しい事で驚きたいといつも思っています。それは何か大きな出来事ではなくて、小さな音や、微かな匂い、そういう事から感じるのだと思います。そういう経験をさせて戴いて、本当に感謝しています。皆さんそれぞれが好きなように、私の作品を感じてください。